



みんなの がっこうの どうぶつ

2014 年月4下旬
第4号

発行責任者：公益社団法人 栃木県獣医師会 南支部 学校飼育動物委員 すずき しげゆき
☎0285(41)0323 fax0285(41)0322
電子メール suzuki@brace-ah.jp



この号の内容

- 1 高病原性鳥インフルエンザ 資料特集号
- 2 根拠に基づく動物飼育 社会状況 2
- 3 動物飼育を見直す 前号の訂正とお詫び

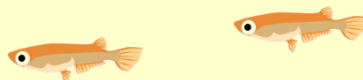
1. 高病原性鳥インフルエンザ 資料特集号

先ごろ、熊本県で高病原性鳥インフルエンザが確認されたことは、鳥を飼育されてる小学校のみならずご心配のことと思います。

今回、「みんなの がっこうの どうぶつ 第4号」に、「高病原性鳥インフルエンザ 資料特集号」を付け加えました。

いざという時に参考になればと思います。備えとしてご活用ください。

今回確認された高病原性鳥インフルエンザは、衛生的な環境では人に感染する可能性は低いとされています。ご安心いただきながらも、十分に備えていただけますようお願い申し上げます。



2. 根拠に基づく動物飼育 社会状況 2

今までになかった傾向の問題が生まれてくる。

特に、深く関わることを避ける傾向、自己中心的な一方的な主張をする傾向、命（または死）を軽く見る傾向。

人間の脳の構造は、三層構造。

霊長類脳は最初は空っぽ。その後の経験で満たされる。

前号で記述した通り、子供たちを取り囲む環境は、実体験を伴わなかったり、温もりを感じにくかったり、一方的な仮想的な媒体からの情報の影響を受けやすいものようです。

社会環境の変化から、そんな環境に取り囲まれている子供たちには、今までになかった傾向の問題が生まれてくることは、想像するにたやすいことでしょう。特に、深く関わることを避ける傾向（無関心、無責任）や自己中心的な一方的主張をする傾向（一項関係^{注1}、思いやり欠如）、命（または死）を軽く見る傾向（命の仮想化）などは、特徴的な傾向ではないかと想像します。

^{注1}「私」だけが一項関係。「あなたと私」が二項関係。「あなたと私と〇〇さん」が三項関係。項数が多いほど、複雑なコミュニケーション力を必要とするようです。

人間の脳の構造は、三層構造と言われています。脳幹（脳の一番真ん中にある部分）、大脳旧皮質、大脳新皮質の三層です。この中で、脳幹は生命の維持に関わる部分で「爬虫類脳」と呼ばれる部分です。次いで、大脳旧皮質は原始的な感情や行動を司る部分で「哺乳類脳」と呼ばれています。最後に、大脳新皮質は人間としての感情や行動を司る部分で、「人間脳」とか「霊長類脳」と呼ばれています。

人間は、生まれた時にはすでに「爬虫類脳」は完成された状態と言われています。その後、歩き始めるまでに「哺乳類脳」が発育し満たされ、さらにその後「霊長類脳」が発育し満たされるとされています。

脳科学的には、霊長類脳は最初は空っぽで、その後の経験で満たされ、経験がなければ満たされないとされています。この、霊長類脳が十分に満たされない場合に、哺乳類脳や爬虫類脳の支配が強い傾向が顕著になると言われています。

それでは、霊長類脳はどのようにして満たされていくのでしょうか？ 次号につづく



ビオトープは、動物飼育とは全く異なるもの。

ビオトープは、解放状態である必要がある。

学校で動物を飼育する中で、根幹をなす部分は、「かわいい」、「ずっと一緒にいたい」と感じる

こと。
使用していない飼育舎に、温かい動物を飼ってください。



「かわいい」と感じてもらうことから、動物飼育は始まります。

感想をお寄せください!

今回のように、色々な方のご意見をお待ちしております。

遠慮なく、ご指摘ください。

発行責任者までご連絡ください。

suzuki@brace-ah.jp

3. 動物飼育を見直す 前号の訂正とお詫び

前号で、使用していない飼育舎の活用のアイデアとして、ビオトープをつくることを記述いたしました。この件に関して、関係者の方から、「ビオトープは、動物飼育とは全く異なるもの」とのご指摘を頂きました。

改めまして、ビオトープに関する前号の記述を訂正いたしますとともに、学校飼育動物関係者、ビオトープ関係者にお詫び申し上げます。

ビオトープは、自然環境の成り立ちや動植物の習性や植生、共生関係を理解するため、また、人間も自然の共生関係の一員であること、自然を大切にすることなどを理解するのにとても有意義なものです。

宇都宮大学でも、小学校の教育支援活動の一環として、「ビオトープ」をつくる事のノウハウを提供しているようです。(宇都宮大学 ホームページより)

ビオトープは、植物や昆虫、水生生物、魚、鳥などが外の環境とつながりながら互いに共生させるために、開放の状態である必要があるようです。それを、飼育舎の中の日陰の閉鎖空間では、ビオトープは共生関係を構築できず、結局は、枯草のある水桶になってしまい、ビオトープの本来の目的を導くことができず、一時的に鑑賞するだけの結果で終わってしまいます。

では、学校での動物の飼育はどのような意味合いを持っているのでしょうか？学校で動物を飼育する中で、根幹をなす部分は、低学年の子供たちが初めてウサギを抱っこしたときに感じる感情にあります。

獣医師会では、希望される小学校に出向き、「ふれあい教室」を実施しています。「ふれあい教室」でウサギの正しい抱っこの仕方を教えるとき、初めてウサギを抱っこしたほとんどの子供が、「温かい」、「ふわふわしていて気持ちいい」、「かわいい」と感想を述べます。また、今までウサギを飼ったことがなかった飼育担当の先生が、夏休み中にご自宅にウサギを預かった際、夏休みが終わる時、先生も先生のお子さんも、「学校に返したくない」と感じたこと、お伺いしたことがあります。

最初に「かわいい」と感じ、飼育を続けていくうちに「ずっと一緒にいたい」と感じることに、感じさせてあげることが学校で動物を飼育することの根幹になり、それから発して、色々な教育的意義を見出すに至ると考えます。「ふれあい教室」は、そのためのはじめの一歩だと考えています。

使用していない飼育舎に、ビオトープをつくるのではなく、そこに“温かい動物”を飼ってください。「我々獣医師が、精一杯お手伝いしますから、温かい動物を飼ってください。」

訂正いたしますとともに、改めてお願い申し上げます。



公益社団法人 栃木県獣医師会
Tochigi Veterinary Medical Association

公益社団法人 栃木県獣医師会
学校飼育動物委員会

〒320-0032
栃木県宇都宮市昭和1-1-23

☎0286(22)7793 Fax0286(21)9660

http://www.tochigi-vet.or.jp/activity/chairman_02.html